

## 飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

### 第 291 回 感性を高める 10 か条 ~ 佐藤満著『社長の手紙』より

2008.12.28

同じことを見たり体験したりしても、人によってインプットの量や質が全く異なってくる。問題意識があり、感度のいい人は、そうでない人に比べ、一生のうちにどのくらい「得」をするか、できるなら測ってみたいものである。この両者、一体どこが違うのだろうか？

色々な要因はあるだろうが、間違いなく「感性」が違うのだと思っている。そこで今回は、いかにしたら「感性」を高めることができるか...題して「感性を高める 10 か条」をご紹介したい。「10 か条」そのものの出典は、佐藤満著『社長の手紙』（平成 20 年 7 月 グラフ社刊）であるが、コメントは小生が勝手に入れた。異議異論があるかもしれないが、まずはご容赦まで。

「**自然の摂理に逆らわないこと**」、当然ながら人間といえども自然界に生息する動物。動物である以上自然の摂理に逆らえないこと、実に真理である。人間だけは別...と思いが上がった自信過剰が、破滅に導くこと、古今東西の哲学・宗教の原点であろう。

「**良い環境の中で感動を味わうこと**」...仮に一流の芸術と三流のそれがあるとすれば、後者とのみ触れ合ってはだめだ。超一流のウィーンフィルハーモニーの音楽に慣れ親しむと、自分の耳も超一流になり、三流の音楽ばかりに染まっていれば、三流の耳でしかないとと思っている。人生もいかに多くの一級品の人と知り合うか、それだけで違ってくる。

「**末端、現場を知ろうとすること**」...現場に行つて自分の目で見よ！ 現場、現物、現実の「三現主義」、優秀なリーダーには必須アイテムである。それと、「ピンきり」、ピンだけ語り、キリを知らない体験・思考は、まずもって片手落ち。世の中半分しか見ていない、斜め指向の可哀想なタイプである。ピンだけでも、キリだけでも、適正な感性は醸成できない。場末のホルモン焼きと、一席 30 万円一流料亭の味の、両方を堪能したいものである。

「**快、不快の印象を大切にすること**」...心地良い事は誰でも分かる。不快に感じたその思いを、忘れてはならない。その嫌な気分を、決して人に押し付けてはならない...という戒めである。これが分からずして、気配り、心配りのおもてなしは、絶対できない。

「**自分と違う立場の人の存在を知り、認めること**」...思想、育ち、環境、好み、そう、人には違いがいくつでもある。それをお互いに理解しあうことから、コミュニティは始まる。それができない人が「ジコチュウ」、あるいは仲間だけでとぐるを巻く、保守的、排他的な塊となり、「楽屋落ち」でしか笑えない、悲しい集団でしかない。

「いつも違う環境に身を置いてみる」...上から見ると円形、横から見ると長方形、それがコップの姿。世界地図の中の日本は実は真ん中ではない。地球儀でみるとアメリカとロシアは向かい合っている。ヨーロッパとアメリカはそう遠くないが、日本までは、いかにも遠い。チョイト、違う環境に自分を置いてみると、別世界が見えてくる。以前コラム（第 225 回）でも書いた、世阿弥の「離見の見」である。...能を舞う演者である自分は、目前や左右までは見ることができる。それは自分の目で見ているにすぎず「我見」(がけん)である。しかし「我見」では、自分の後ろ姿まで見ることはできない。つまり、「我見」では自分の姿を見ることはできない。舞っている自分の姿を見ることができるのは、舞台を客席から見ている「お客様の目」である。それを「離見」(りけん)という。「離見の見」(りけんのけん)にて見れば、「見所同心の見」といって全体を捉えることができるという。特に後ろ姿は「離見の見」、つまり、あらゆる観客の目の位置に、自らの心の目を置いて、自分の完璧な舞姿を見届けなければならない。...

「歴史を振り返ること」...歴史は人の歩いてきた証<sup>あかし</sup>である。成功もあれば失敗もある。歓喜もあり憎しみもあり、残虐も、慈愛も全て歴史の中にある。人は歴史の繰り返しで生きている。人の行動の全て、これからの思考も、実は、歴史の中にヒントがある。歴史を振り返ること、原点であろう。

「古典を学ぶこと」...歴史を築いた先人達の知恵と工夫、文化や思想・哲学の集大成が「古典」である。古典は、悩める現代人の最高の「教科書」だと思っている。

「素朴な興味、関心、好奇心を持つこと」...なぜ？ どうして？ そんな疑問を一切感じなくなった人間を想像すると、恐ろしい限りである。進化の源である「興味・関心・好奇心」をなくした瞬間、ただ、やたら、むやみに年と重ねるだけの「老人」、つまり心身ともに「退化」が始まる。

「静かに自分を見つめ直すこと」...常にわが身を省<sup>かえり</sup>みる。その中で失敗を客観的に分析し、将来の「肥やし」にしていくこと。失敗にこだわり過ぎると、将来を見失うこととなる。そのためにも、冷静に見つめ直す必要がある。

「感性」は生まれながらの資質にもよるが、自己研鑽<sup>みが</sup>によって磨かれる。自己研鑽とは、物事に対する関心、未知のものに対する探究心、困難なものへの挑戦する気持ちを常に持ち続けることである。「感性」があるか否かは、物事をどう見て、何を感じ、何を得て、どう行動するかといった、全ての行動に関わってくる。

「感性」がある人には、必ず大きな「未来」があると信じている。

少し時間をかけてでも、自己研鑽を継続し、高い「感性」をもてるよう、来年こそはチャレンジしてみるか...そんな年越しを迎えつつある。  
良いお年を、お迎えください。